

人間関係なんて 数学の問題解くよりも 難しいのだ 第1部

本日の「大先生のためになる話」は人間関係のお話。

君たちも中学3年生なので、なんだか小学生に毛の生えたような1年生とは違い、ちょっとした話をして反応があるのでおもしろい。

さて、大切なことは、「一人一人が考えること」

そして、僕たちの社会の原則は

「自分のいやなことは人もいや。」

「自分のしてほしいことは人にするな。」

「みんなが助け合わなくては、何もできない。」

ということではないだろうか。

何も考えずに1日1日を過ごしていると、あっという間に人生の終わりがやってくる。いったい自分の人生は何だったの？というところで終わってしまう。だから諸君、一人ひとりがいろいろと考えること。

で、今日は人間関係の話。といっても、人間関係なんて身の回りにいっぱいある。

身近なところでは親子、兄弟姉妹、親戚に家族、ご近所もあれば、学校に来ればクラスの友達、先輩後輩、先生との関係、社会に出れば同僚もいれば、上司に部下、実にさまざまな人間関係がある。

だけど、その人間関係が一番難しい。数学の問題を解いている方がよっぽど簡単だ。

数学の問題なら、誰かに習えば何とかなる。

でも人間関係のことはそう簡単には人から学べない。

数学の問題なら、参考書もあれば、解答集もあるし、一人で学ぶこともできる。

でも人間関係のことはどこにでも参考書があるわけでもないし、一人では解決しない。

数学の問題なら、いろいろ努力して勉強すれば、解決への道が開けてくる。

でも人間関係のことは、どれだけ力を注いでも解決しないことがある。

数学の問題なら、最後にたどり着く答がある。

でも人間関係のことは最後にたどり着く素晴らしい答があるとは限らない。

今日はその人間関係の中でも友達の話。

読み物は2つあるが、今日は第1段なので、男の立場。

森 毅（もり つよし）という京都大学の名誉教授。数学の先生だ。僕がこの人を知ったのはかなり前で、まだ現役の先生だった。講演があるというので、わざわざ講演を聞きに行ったことも2度ほどある。

秋山 仁 大先生もそうだけど、数学の先生で、文章書かせるとおもしろい人がいる。この森 毅という人今じゃ、退官して、悠々自適（？）ときどきテレビのコマーシャルなんかにも出演してる。おじさんというより、もはやおじいさんの域である。1928年生まれだからもう70才を過ぎてしまった。

そういえば、今はもうこの世にないが、遠山 啓（とおやま ひらく）という数学の先生も尊敬する一人だ。この人の文章もおもしろい。

話はそれだが、この森 毅 大先生の「まちがったっていいじゃないか」（創隆社、ジュニアブックス）の中から一文「友人たちと」

この本は今ちくま書房から文庫本になって出ていると思うので、安いから買って読んでみるとよい。ゲームセンターで10分で費やしてなくなってしまうお金で、もしかしたら一生を左右するものが手にはいる。それが本である。学生時代しか、なかなか読書はできないぞ。社会人になると、仕事関係の本は読んで、なかなかいろいろな分野の本は読めない。よっぽど時間を作って読むようにしないと社会人になると本は読めない。だから今のうちに、本を読む習慣をつけておくことだ。

また話がそれた。この文の中には友人関係のほかに、この文が書かれた頃（1970年代後半）から大きく問題となっただけのことが書かれてある。

なにしろこの森 毅 大先生はちゃらんぼらんでいい加減で、まるで君たちの担任のようであるので、書くこともあっちへ行ったりこっちへ来たり（担任ほどはひどくないけど）しかし、友人関係の悩みは確かに中学生では一番多いだろう。なにしろ、学校へ来ての一番の楽しみは友達とのおしゃべりなのだから、逆に言うと、友達とうまくいかない、全くもって学校へ来てもおもしろくないというわけだ。

ということで、この4月以来、担任はどれだけ人間関係の問題や悩みを聞いてきたことだろう。

どれだけ人間関係のややこしさを実感してきたことだろう。

どれだけ直感でみんなの人間関係の危うさを感知したことだろう。

どれだけ感情のおもむくままの行動に困惑したことだろう。

どれだけ友達の悪口を聞いてきたことだろう。

特に女子である。男子よりも女子がややこしい。

なぜなら、言葉は悪いが、女子は群れたがるからである。女子は日常的にくっついたり離れたりを繰り返す。まるでビリヤードの玉のように...である。ビリヤード、いわゆる玉突きである。くっついていて2つの玉にぶつかって、2つを引き離す。くっついていて2つの玉にぶつかってひとつだけを遠くにはじき飛ばす。あるいははじき飛ばされる。3番の玉と4番の玉がくっついていたら、今度は4番と7番がくっついている。そんなように.....まるでビリヤードのゲームを観戦しているようである。

それと嫌いな子に対する対応もじめじめしているのが女子である。

物をかくす、こわす、落書きする、手紙を入れる、なんてのが女の子の手口。それに陰で悪口言う、うわさを流す、そして聞こえよがしに「いやなヤツ」とか「むかつく」などとその子の後ろや横で言う、何しろじめじめ、ねちねちが女の子の特徴。

それに対して男子は結構一匹狼的なところがあって、一人でも何ともないよ、という顔をしていることが多い。これも言葉は悪いが、男子が群れるときはたいてい悪いことをするときである。男子はなかなか一人では悪いことができない。二人三人となるとがぜん大きな気持ちになって何でもしてしまうのが男子の特徴だ。

ま、これらはいずれもこれまでの経験からの話なので、あたってないぞと言う人はまた感想、意見を書いて下さい。

ということで、そのややこしい人間関係の話の中から、今日は男の立場から森 毅 大先生の一文を紹介する。この文章で何を考えるかは君たち次第である。

今日のテーマは人間関係。最後に担任からのメッセージ。

いろいろな人がいる。

そう、自分もそんな中の一人なのさ。

みんな個性がある、みんな顔も違う、考え方も違えば趣味も好みも違う。

好きなやつもいれば、嫌いなやつもいる。

そりゃそうさ。それも当たり前。

で、自分も好かれることもあれば、嫌われることもある。

これまた当たり前。万人に好かれるやつなんていないさっ！

だから、友達になったり、ケンカ別れしたり。

そりゃそうさ。人類皆兄弟って言ったって、そう簡単に仲良くなれるもんじゃなし。

気に入らなきゃケンカもするさ、悪口も言うさ。

でも、気があって友達にもなるし。

だから、そんな人間が38人も集まれば、そう簡単に一つにまとまるもんじゃない。

ましてや学年223人が一つにまとまるはずがない。

それは仕方ないよ。みんなが仲よくまとめれば、それにこしたことはないけれど、そんなことはないんだな。

だからどうしたらいいって。

そりゃこう考えるしかないな。

お互いがちがう人間だと認めること。

お互いが一人一人独立していると認めること。

別に友達にならなくていいのさ。でも、意地悪はやめとけ、いじめもやめとけ。それは結果的には自分に返ってくるぞ。最後に一人になるのは自分だぞ。なぜなら君の中の意地悪な心が最終的には友達に見破られて、友達が君から去って行くからだ。一人を嫌いになった瞬間に、三人から嫌われているのさ。

だけど人間、一人一人は孤独なのだ。なんだかんだ言ったっていつも一人だ。

だけど、**連帯は孤独から生まれる。**

おまけです

このような反響をいただきました。

書いている方としては、このように何らかの反響があると嬉しいですね。

中に「日本の若者は情けない」と書いたけど、まだまだ日本の若者も捨てたものじゃないね。結局はみんながしっかりしなくちゃならないんだね。

バカな親がバカな子どもを再生産していっては世の中はよくなる。どこかで誰かが気がついて、この連鎖を断ち切らないと、またまた人をいじめたり殺したりする人間が後を絶たなくなるぞ。

それは君たちの手にかかっている。